

「意味」を求める存在としての人間

全て動物は、世界の内にちょうど水の中に水があるように存在している。もっとも動物的な状況の内にも、人間的な状況の基本要素があることは確かである。かりにどうしてもそうする必要があったら、動物も一個の主体とみなされ、それに対し世界の他の部分は客体とみなされるかもしれない。しかしながら動物が自分自身をそう眺める可能性は、けっして彼には与えられていない。

—————ジョルジュ・バタイユ『宗教の理論』

自然環境に直結した本能によって定められた行動様式が、動物一般と比べて著しく後退している人間は、「世界に開かれた」(weltoffen) 自由を享受する一方で、自分が誰であるかを決定してくれる、意味の網目としての「世界」を必要とする。

人間がその動物としての特殊な存在様式から創りだす、この意味の網目としての世界は、それが「つくりもの」であることに気づきさえすれば、そこから脱却できるような副次的な存在条件ではない。

アドルフ・ポルトマンは、文化と人間の関係について次のように述べている。

この「文化的生活」というのはひろく一般的に人間のものであり、ほんとうに文字通り自然人というようなどんな人間集団もみつからないし、また同じようにどんな「自然民族」もありはしない。なぜなら、文化こそは、たとえ「もっとも原始的な」人間であろうとも持っている、まさしく文字通りもっとも一般的な意味での人間の行動様式の一部だからである。(90頁)

意味の網目としての世界と人間存在の関係は、「タマゴが先か、ニワトリが先か」といった議論と同じように、一方を他方から切り離して考察することはできないものである。人間が意味の網目としての世界をつくるのではなく、意味の網目としての世界とともに在るのが、人間なのである。

*

言語や習慣、社会のシステムや多様な知識の体系が織りなす「人間の世界」は、自然環境に直結した動物の行動様式とは、根本的に異なる文化的・社会的行動様式を人間に課することになる。人間にとって動物の「自然の世界」は、決して直接に経験することはできない可想的世界なのである。

人間が何かを経験するときは、その経験はつねに／すでに意味の網目としての世界を通して構成され、理解され、記憶される。「自然人」という表現は、どのような場合にも形容矛盾になるしかない。一方で、上記のバタイユの引用にあるように「動物は、世界の内にちょうど水の中に水があるように存在している」のである。

水の中の水は、水槽や容器を洗めて容れ物の内と外を仕切らないかぎり、ある部分と他の部分を切り分けたり、区別したりすることはできない。部分は全体であって、全体は部分なので

ある。サバンナを疾走するインパラをライオンが仕留める姿を映像で見るとき、いつも不思議な感慨に浸るのは、そこに強者が弱者を支配する力関係や弱い者同士の駆け引きを見るからではなく、ただ「自然に生きて、自然に死ぬ」動物の世界の姿に郷愁を感じるからであろう。

意味の網目としての世界に投げ込まれて生きる人間には、自然に生きて自然に死ぬことは決して許されない。自然環境に直結した本能的な行動様式からはある程度開放され、この意味での「世界」から自由になった人間は、その一方で自分が誰であるかを決定してくれる、意味の網目としての「世界」に囚われるのである。

ただ、意味の網目としての「世界」によって付与される自己の存在は、自然環境と直結した本能のように、完全な意味づけを私たちに与えてはくれない。人間の社会における勝者と敗者の姿が、ライオンとインパラの姿のように自然な秩序の帰結に見えないのは、このためなのだろう。

自然界においては、たとえインパラがライオンに打ち勝つことはあったとしても、決してライオンがインパラに食べられることはない。しかし、人間の世界においては、勝者と敗者(あるいは強者と弱者)はあらかじめ自然に決定されていない。自分が誰であるかは意味の網目としての世界のなかで決定されるが、その決定は自然界における動物の位置づけのように、生得的でも完全でもないからである。

だからこそ、世界に開かれた一本能による決定からある程度解放された一自由を享受する人間は、ほぼ何にでもなれる可能性を与えられている一方で、本当は何も決定していないという不安に、直面せざるを得ないのである。

この不安は、政治的・文化的枠組みを通して意味の網目をより強固に固定化することや文明の進歩によって、克服することができだろうか？

*

これまで、人が哲学や芸術、宗教の営みに魅了されてきたのは、人間が「世界に開かれた」存在であることから生じる、さまざま「答えられない問い」に、私たち人間がいつも向き合ってきたからである。

「人は何のために生まれ、何のために生きているのか？」

「世界のはては何処にあるのか？」

「世界には、はじまりと終わりはあるのか？」

「本当の“愛”とは何か？」

「わたしは、誰なのか？」etc.

サバンナに悠々と横たわるライオンにとって、このなかのどの問いも大きな意味を持つようには思えない。人間が人間であることから生じるこのような問いに、意味の網目としての世界は、なぜ完全な答えを与えてくれないのか。

次回からは、人間の知性の特質に言及しながら、さらに考察を深めていきたい。